

ご挨拶

理事長 井谷五雲

このニュースレター第7号が皆さんのお手許に届くのは、開催に賛否両論あった東京オリンピックも終了し、パラリンピックが行われている頃でしょうか。本協会のことですと、例年の中央研究会が行われ、会員相互に篆刻三昧の時間を過ごしている頃でしょうか。がしかし、残念ながら現在はコロナウイルスデルタ株が猛威をふるって我々を恐怖に曝しています。くれぐれもご用心下さい。

過日、東京池袋のサンシャインシティで読売書法展の審査が行われ、審査部長代行に尾崎蒼石、審査員に山下方亭・井谷五雲・黒田玉洲の三氏、加えて事務方の審査部には副部長に真鍋井蛙、部員の喜多芳邑・酒居石荘の合計七名の布陣で審査会に臨みました。公募数は会友を合わせて百五十点ほどでした。このコロナ禍にあつて出品された皆さんの努力に対して敬意を表します。書壇もコロナ禍にあつて再稼働というところ、我々は加えて研究にも精を出しましょう。このニュースレターがお役に立つことを期待しています。

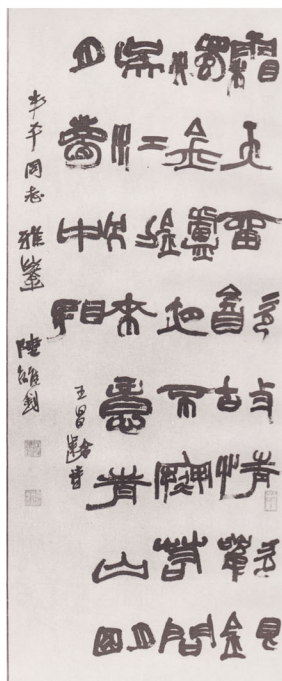
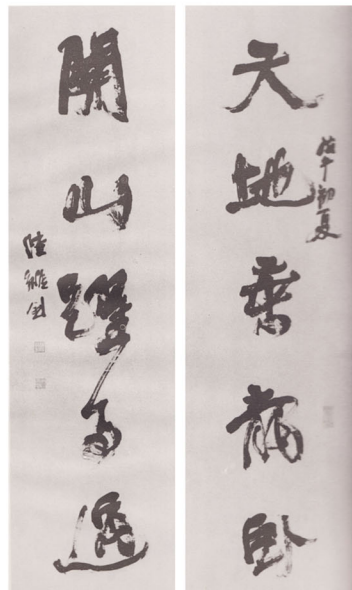
「張耕源書画篆刻作品集」を見て 「陸維釗」を想う

副理事長 喜多芳邑

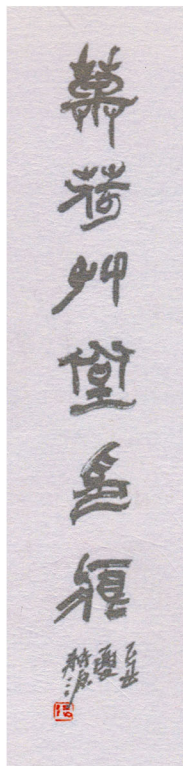
予てより張耕源先生の肖像印は、西泠藝報等に掲載され知名度が高かった。しかしながらその書画等については、あまり意識して見ることはなかった。数年前、杭州で脚をもって書画篆刻を成し遂げている孔黎翔氏の印譜の題簽にハツとした。何うと師匠である張耕源先生に書いてもらったとのこと。私が「陸維釗」と書くくと張先生の先生だという。張耕源先生は浙江美術学院の学生として、潘天寿、陸維釗、諸楽三に学ばれ、多くの益を受けられた。

私自身は二十歳代、隣り合う文字の偏と旁の関係が魅力的な「陸維釗」に傾倒し書作に取り入れていた。一九八〇年代、中国雑誌「書法」や「西泠藝報」、「陸維釗書画集」を入手し夢中になっていたことを思い出す。

△ 陸維釗書作品 ① ②



△ 孔黎翔印譜題簽



さて今回の「張耕源書画篆刻作品集」を見てみると、先生がいかに篆隸において陸維釗を敬慕しておられるかが解る。①七ページ 《游子藝》「背擬維釗先生筆意…」と落款にある。背擬とは擬態、擬態とは様子を似せることである。②十八ページ 《猷作鼓擬釗筆意》「擬維釗翁螺扁書筆意…」と右に朱書されている。【最終頁へ】

常任顧問 山下方亭

—夏王朝は存在したのか?—

コロナ禍の終息はみえない。連日メディアは同じ事をくり返しており、暗いニュースが続いているので気分転換に少し明るい話題を追ってみたい。私が四十年前に見た夢を語ってみよう。その頃、私の興味は中国の歴史の中で「幻の夏王朝」が頭の中にあり、そこから殷王朝にどうつながっていくのか、更に加えて周王朝から春秋、戦国、秦漢魏晋と中国社会の考古学は繋がっている。あれから四十年、中国の考古学はどのように進展したのか?

—幻の夏王朝—

あれから四十年たった。印の歴史を学ぶうえで中国の歴史を先ず自分なりに理解を深めなければとの思いがあった。その後、当時は幻の夏王朝と言われていたのがどうなったのか。「幻」の王朝は神話の世界とされていた。我国ではその実在について、研究者は慎重な態度をとっていたという。しかし中国の考古学では、夏王朝につながる堯、舜、禹は実在したとしてその都がどこにあったかと研究を進めて議論していた。中国の考古学の状況は著しく大きく進展していた。

中国古代に三皇、五帝の歴史伝説があるが、単なる神話の世界ではなく考古学で実証する事が中国の考古学で求められており、学者は先ず「史記」や「春秋左氏伝」や戦国墓から出土した「竹書紀年」により史実を辿るという。

—仰韶文化と龍山文化—

中国地質調査所の顧問であったスウェーデンのアンダーソンは河南省澠池(べんち)県仰韶村で新石器時代の遺跡を発掘した。彩陶と紅陶の陶器が多数発見された。この遺跡に因んで名付けられたのが仰韶文化と言われる。更に一九二六年、山西省夏県西陰村で彩陶の遺跡を発掘。この夏県では堯・舜・禹や夏王朝の伝承が多

く、夏王朝文化の説がある。一方、山東省章丘市の龍山鎮で黒陶を持つ城子崖遺跡を発掘した。この黒陶器文化が龍山文化と言われる。

※彩陶陶器(アンダーソン土器)と黒陶陶器は日本の骨董界にも出まわっている。

—二里岡遺跡の発見—

河南省、鄭州市の南郊の二里岡を中国科学院考古研究所が鄭州市一帯を発掘し二里岡文化と言われている。

—二里头遺跡の発見から夏王朝へ—

中国は伝説として各地に古代から残る堯・舜の伝承がある。それを手がかりとして発掘調査が可能なようで、河南中部や山西省を調査して、偃師市の二里頭遺跡を発見した。この河南省、偃師市の二里头遺跡の発掘成果をもって夏王朝の実在を証明すると共に夏時代が存在している。龍山文化との関りも研究が進んでいった。詳らかな発掘のドラマは数々あるが、ここでは紙面の都合で略した。

—香港で出会った銅牌—

この夏王朝に関わる事に話題を変えて、二〇一六年頃、香港の古玩具店で見つけた銅牌(どうはい)である。中国の考古学書で必ず巻頭を飾る???記憶にあった。あの「獣面文銅牌」だ!と購入した。冷静に考えるとそれ程の品がその辺にあるはずがないのだが、ここは香港という事を忘れていた。しかしトルコ石をこれ程、詰めて並べて仕上げることも大変である。

尊彝閣蔵 獣面文銅牌 ▽

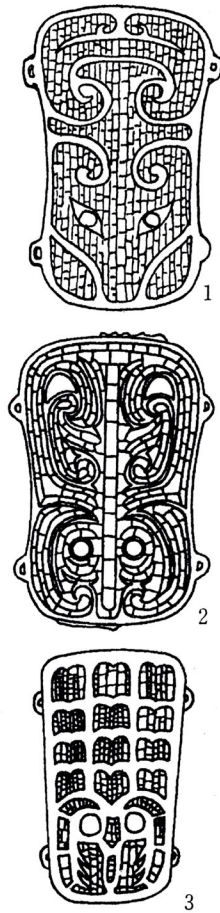


縦150mm 幅100mm 上部100mm 下部95mm

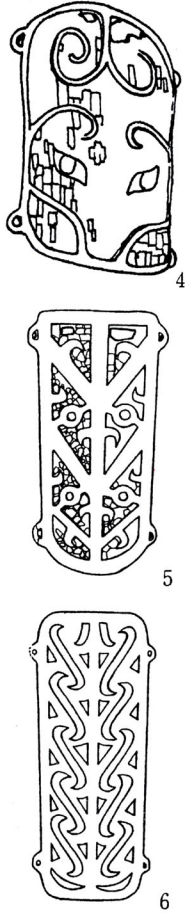
—驚きは三ヶ所で出土—

草履形の銅板にほどこした獣面文にトルコ石片をモザイク状に埋め込んだ銅牌は二里頭遺跡の三基墓から一点ずつ出土した。加えて三星堆遺跡の真武倉包包で発見の祭祀坑でも三点銅牌が出土した。トルコ石の象嵌は同じだがデフォルメされて変化していた。更に三星堆遺跡から西北一〇キロのところでもデフォルメの進んだ獣面文銅牌が採集された。これは各地に伝播していたのである。また甘粛省、天水市でも出土の遺跡は不明ながら、二里頭遺跡から運ばれた可能性が高いと言われ、この銅牌以外の玉鏢、玉璧、玉斧、玉刀が伝播して黄河、渭河の文化交流が窺える。

◁ 河南省二里頭遺跡で発見



◁ 上 / 甘粛省天水市で発見 中・下 / 四川省三星堆遺跡で発見



—三星堆のその後—

一九八六年に発見された三星堆の発掘がどんどん進んでいる。四川省徳陽市、漢市と広がりを見せて、現在も発掘を継続している。広範囲に分布して新しく発掘されその結果、理解しがたい品々の発見があつた宇宙人遺跡とまで言われている。先に書いた四十年前の幻の夏王朝は実存した事が証明されたが次の段階に入っている。

—四〇年後にはどうなっているか—

今後この幻の三星堆か中国文明か、長江上流域の文明か、数年前に成都市内で発見された金沙遺跡を見学したことがあるが、この蜀の地において黄金文化の世界、金沙遺跡も含めて中国に新たに世界四大文明に変わる五大文明が現れる可能性がある。四十年後を見てみたいものである。

—終わりに—

中国各地の数百ヶ所の遺跡の調査は膨大な量と時間を要する。各地の様々な遺物を放射性炭素年代測定やANS法(加速器質量分析)を駆使して高精度の年代を測定した結果である。紙面の都合で書けるスペースは限られている。この獣面文銅牌の購入がきっかけではあつたがこれが甲骨文字や銅牌や銅印に繋がっていくのか興味はつきない。銅牌も興味があればお見せしたい。

※参考文献

『中国文明の原像—夏王朝』
(講談社学術文庫)
京都大学 人文科学研究所教授
岡村秀典先生著

《西安からの最新報告》

二〇二一年二月十七日

西安郊外の西安咸陽空港の拡張工事の現場で三五〇〇基の古基を発見、更に進めると四六〇〇ヶ所以上の唐の遺跡がみつかった。

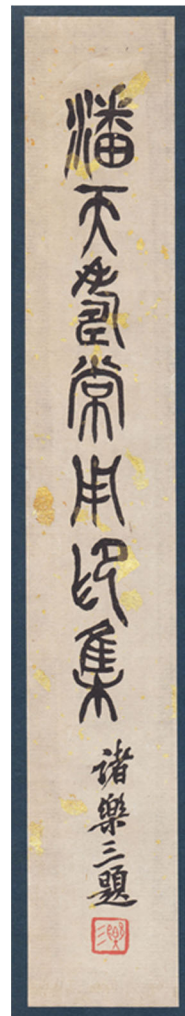
西安咸陽空港拡張工事現場
にて古墳三五〇〇基発見



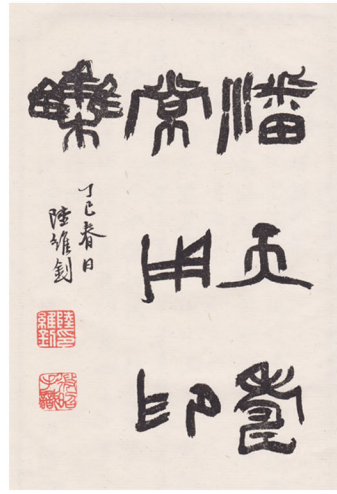
③二十一ページ 《岳武穆詞》「樵微昭先輩螺扁書…」微昭は陸維釗の字、作品上部にも朱書で「臨陸維釗行書二則」とある。以上三作品は明記されているが、他の画賛にも陸維釗風のものが多くみられる。

張耕源先生は絵画や行草に於いて、陸維釗と違った世界観を持つておられ、若い頃より相当な取り組みをされてこられたことに感服するばかりである。作品集掲載の《手稿資料》を見れば一目瞭然である。

◁ 潘天寿常用印集・題箋



◁ 潘天寿常用印集・封面 ▷ 陸維釗



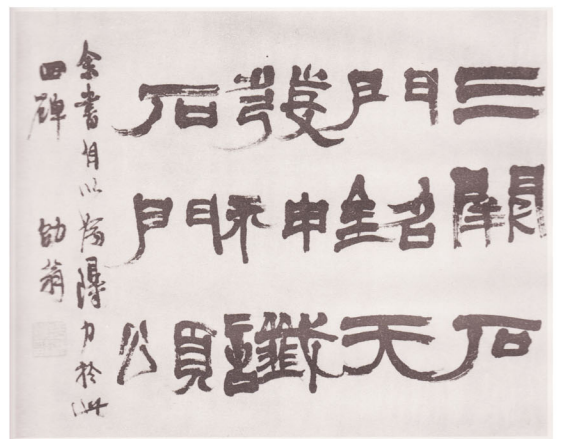
一九八〇年、浙江美術學院出版の「潘天寿常用印集」は、持つておられる方も多しと思う。諸樂三が題箋、陸維釗が封面を書いている。三人の交友関係が伺える。

陸維釗（一八九九〜一九八〇）、原名子平、字微昭、晩年自署劬翁。浙江平湖湖人。晩年には独創的な「非篆非隸、亦篆亦隸」と称される新体を作り上げた。現在「螺扁」もしくは「陸維釗体」「陸体」といわれる。書法教育先駆者のひとりである。元々「螺扁」とは古書体名で徐鉉、吾丘衍により言われた。現在見ることはないが、陸維釗の「扁篆」をもつてそう称している。陸維釗は、書作にこのように書き残している。「《三闕》、《石門銘》、《天発神識》、《石門頌》、余書自以為得力於于此四碑」。

他に北魏を学んだ楷書、力強い行草も魅了される。

一九九五年、浙江省平湖東海の畔に陸維釗書画院が設立された。知らなかった。是非行つてみたいが、いつになることやら。

◁ 陸維釗書作品③ 及び篆刻作品（瀋陽・専門利人）



※出版物が古いため、印刷が悪くて申し訳なく思います。是非ネットで検索して下さい。張耕源先生の肖像印や陸維釗の書画作品も数多くの鮮明なものを見ることが出来ます。

■ 展覧会のご案内

第三十九回 六轡会展 八月十八日（水）〜二十二日（日） 京都文化博物館

第三十六回 隨風會書法篆刻展 八月二十四日（火）〜二十九日（日）

國際交流展・四川大研堂書法篆刻藝術院／隨風會女流五人展／特別陳列・楚系青銅器・古銅印等々 京都市京セラ美術館

第二十九回 遠邇篆会展 九月二日（木）〜五日（日） 磐田市立中央図書館

第二十四回 齊平展 九月十一日（土）〜十二日（日） 大阪産業創造館三階マーケットプラザ

第三十六回 畦石舎展 十月二日（土）〜三日（日） 日図デザイン博物館

第十四回 長修会展 令和四年一月二八日（金）〜三十日（日） 半田市福祉文化会館（雁宿ホール） 講堂

第六十七回 全関西美術展 令和四年二月五日（木）〜十五日（火） 大阪市立美術館

※本年度の社中展等、開催予定がございましたら事務所までご連絡ください。